

令和4年10月5日発行(毎月5日) (金曜日)
第62巻10月号(通巻799号)

風土



10

なにさがす起居や鶏耳にゐて

(句集『竹取』より昭和四十二年作)
この句には「十一月二十七日、神山杏雨死す」と前書きがあります。杏雨は昭和三十五年、桂郎師を編集や選者として「風土」を立ち上げました。杏雨は主宰をしていましたが、ほとんど桂郎師にまかせていました。ところが、昭和三十九年、体調の悪化や経済的な行き詰まりで、主宰を降りてしまい、桂郎師が後を継がざるを得ませんでした。休刊が続いた後、わずか八ページからの再出発でした。

竹が皮ぬぐ音雀逃がしたり

(句集『竹取』より昭和四十三年作)
この句は桂郎師の句集にはありませんが、手塚美佐氏が俳人協会刊行の『石川桂郎集』の中で採り上げています。桂郎師がなぜ載せなかったかを美佐氏が述べています。「句集『高蘆』刊行の際、酒と竹の句が多すぎるとして桂郎が外してしまった。だがこの句の愛読者は多い」とあります。桂郎師は「逃がしたり」の他動詞が気になっていたとも。

大根を引く桂郎の声とんで

(「風土」平成二十五年一月号より)
今回から句集『月虹』以後の最晩年の作品を採り上げます。この句は回想に基づいた世界で、桂郎師の「大根引く音の不思議に時すごす」を踏まえています。器師は回想の中で桂郎師と遊んでいます。つまり、器師が大根を引くと、後ろから桂郎師が、「やはりその音だよ。それにしても不思議な音だなあ」と声を掛けるのです。

クリスマス妻の時刻の第九かな

(「風土」平成二十五年二月号より)
この句も亡くなった奥さんを想い起こしての世界です。器師の奥さんは数年の闘病生活の後、平成八年十二月二十五日に病院で亡くなりました。その時の句が「妻へ飛ぶ聖夜の第九交響曲」です。それから十数年を経っていますが、「クリスマス」「第九」は器師にとって奥さんの死を想い起こす言葉なのです。「冷えてゆく手に握らせて手をつなぐ」の絶唱もこの時の句です。

吊 忍 南 う み を

ゆふ風や甚平の紐ゆるく結ひ
萍が一夜に田の面埋めつくし
田水沸き鉄塔の脚浮く如し
卵呑む蛇よ真昼の静けさよ
雨粒に水面のへこむ夏書かな

祇園祭 五句

路地占めて鉾立を待つ真柱
坪庭の笹の吹かるる屏風祭
山鉾の発ちたる路地の吊忍
辻回せまはせと急かす鉾囃
群衆の首伸び上がる鉾回し
父の忌の雨を冬瓜弾きをる
夏果ての風が鳴らすは禾の類



竹間集

同人作品



宵囃子

橋添やよひ

塾歸りの駆けて加はる宵囃子
単衣外孫は帯鳴かせ今宵は京娘
不揃ひもいとし宵山わらべ唄
漠らに御輿曳山二九六年にして瘤ある町会所
鷹山や一途の復帰宵囃子
竜頭の大船銚を殿に
銚解くや縄くづの舞ふ裸銚

麦茶煮る

高村 令子

麦茶煮るしづかに齡重ねぬて
緑蔭ややがて近況などポツリ
全きの空蟬に雨ざんざ降り
のうぜんの落花狼籍庄屋跡
癒えぬ子に心残して夕焼道
ぬるく濃く新茶を入れて独人の夜
満天の星座重たき熱帯夜

やませ来る

土井 三乙

山へ向き両手ひろぐる朝の涼
昼寝して夢の中にも本増やす
衰へは脚より来たり木下闇
しばらくは胡坐を解かず夕立後
やませ来る匂ひと言へりさう思ふ
爆音の近くて遠し雲の峰
螢火の一つが離れ深闇に

涼風の膝

浅田 光代

涼風の膝投げ出してぐりとぐら
宮普請つづく一村田水沸く
山々の襷ふかくなる大暑かな
出前持持奥へと通し銚会所
稚児を待つ長刀銚の屋根しづく
銚の埒手桶の水をなみなみと
大丸へ山の螳螂斧かざす

交差点

柿沼 盟子

甘酒を釜に沸かして江戸風鈴
髪切つてうなじの汗を輝かす
評伝のページ重たく夜の短
我が身体浮く炎天の交差点
灸花雑種の犬の引き強く
みんみんのおほひかくせし鳥の声
子雀の脚のうすべに大西日

夏 柳

林 いづみ

天命の働きなりて蟻急ぐ
蜘蛛は日日つぶさに風を紡ぐなり
やうやうに蟬声午後は雨上がる
大暑の日書肆の主の鼻眼鏡
炎天下地獄絵図掛く文殊堂
月あかりの裸身をすべる絹のもの
月影を堀に流しぬ夏柳

花つき胡瓜

小林 共代

花つきの胡瓜に味噌の添へられし
水羊羹雨城楊枝の匂ひけり
底紅や石花の花と早開く
山紫陽花影くつきりと湖の面
蓮まつり蓮開く音聴きに行く
夕虹の片足海にとどきけり
牧草ロール影ごと動き大夕焼

凌霄

中根美保

白といふ褪せやすき色パリー祭
道標に被せてありぬ夏帽子
ミニトマト翡翠のいろの実をつづる
凌霄の蔓に余力のありにけり
日盛や 火袋昏き石灯籠
向日葵や出窓小さき購買部
外灯に微かな音や熱帯夜

大茅の輪

間島あきら

空容るる三百キロの大茅の輪
片にごる合流点や梅雨の淵
抱かむと空へ全開合歓の花
露天湯へ廊走りゆく裸かな
裏木戸をがんじがらめに灸花
額の花はたてに淡き富士の影
カリオンのひびき螢ぶくろかな

裸子

内藤 静

宇治金時崩してはまた世を憂ふ
裸子を抱きてたらちねの裸身
腹筋を割つたる裸自慢かな
灸花謀反のごとく匂ひけり
倒影の塔のかぐるき大暑かな
暁のいろ染みごろのトマト剪る
火男の貌で甘酒吹きさます

蟻地獄

土井ゆう子

この地にあと幾日居据る山背寒
蟻地獄より立ち上がるとき眩暈
噴水や人の集まりまばらなる
音荒く風に閉まる戸半夏生
同じことまた問うてゐる夕端居
祭囃子復習ふ音して暮れゆきぬ
風わづかに重くなりしか夜の秋

山河集

同人作品



南うみを選

白雲を背負ひ祝詞や海開き 森田 節子

階段を拭き上げ跣足よるこぼす
田植の子手をひらひらと足を抜く
ペットボトル両手に攫み大暑ゆく
富士よりの風をとらへて青田波

七月や熱田の杜の火入れの儀 大森 尚子

御神前鍛錬奉納青葉風
炎立つ鞆の呼吸蟬時雨
相槌の音の乾きや雲の峰
鍛錬の刀の雫涼しかり

蛩舞ふ闇に瀬音のかすかなる 三好 康子

五島列島奇岩の火照る大夕焼
わが町を丸ごと洗ひ驟雨去る

夕立あと櫛大樹の若返る

セピア色のモガの大叔母パリー祭

根岸 善行

玉垣の内つ国蛇美しき
「太閤」と「大関」銘酒胡瓜もみ
寝返りて寝返り尽くす大暑かな
昼寝へと本の江つてゆくところ
料理屋の二階へ土用太郎かな

空蟬のかさなり合へる小伝馬町 雨宮 桂子

墓守は無口をとほす蛞蝓
夏うぐひす躓きのぼる石だたみ
夏旺ん列なす僧の竹箒
大夏木太宰の墓のコップ酒

風土独語／南 うみを



階段を拭き上げ靴足よろこばす 森田 節子

俳句は日常の中に詩を見出すものである。この句はいつもの拭き掃除の一駒であるが、「靴足よろこばす」で俄然、階段のひんやりとした感触が足裏に伝わってくる。階段はもちろん木造り。

緑陰やひと息に呑む山羊の乳 谷田明日香

「緑陰」と「山羊の乳」の取り合わせである。それを「ひと息に呑む」で繋ぐ。初夏の木立の下で、搾りたての山羊の乳を一気に飲み干す。野趣味があり、健康的な世界が広がる。

相槌の音の乾きや雲の峰 大森 尚子

一連の句から、刀作りの神事であることがわかる。今、弟子が師と向き合い、互いに槌を打ち合う。その息の合った音が雲の峰へと響き渡る。「乾き」がいかにも夏を演出している。

流れ藻の立ち上がりたる猛暑かな 岡 尚

清らかな流れに梅花藻であろうか。普段ならたつぷりの水量に涼しげにゆらぐのだが、「猛暑」のために水量が減り、藻が露わになっているのだ。それを「立ち上がりたる」と描いた。

夕立あとと樺大樹の若返る 三好 康子

この句の読みのポイントは「若返る」である。激しい夕立が去ったあと、草木は息を吹き返したように緑の世界を提示する。ひときわ樺大樹の緑が映える。それを「若返る」と描いた。

地下を出て大暑のビルに見下ろさる 岡本 尚子

「地下を出て」の二つのバリエーションの句である。ポイントの言葉は「見下ろさる」である。これで読み手は目の前に高層ビルを想い描く。それも「大暑のビル」だ。ぎらつく壁と威圧感が更に暑さを増す。

昼寝へと本の江つてゆくとこ 根岸 善行

面白い句である。「本の江つてゆくとこ」の現在進行形がなんとも可笑しい。昼寝の枕にするのか分厚い本を畳に江らせているところだ。昼寝とはこういうものだと思えてるのである。

早稲の香の吹き上がりくる招き旗 小原芙美子

「招き旗」とは、盆になると死者の魂を呼び寄せるために、寺などが掲げる五色の旗である。これが立つと人々は寺に寄り、墓参りをする。「早稲の香の吹き上がりくる」から、この寺は早稲の田に囲まれた高台にあることがわかる。おそらく村のどこからでも見える「招き旗」であろう。

風土集



南うみを選

緑陰やひと息に呑む山羊の乳 舞鶴 谷田明日香

雷光の夢の中まで入り来る

黒蜜にたやすく染まる心太

梅雨晴間レインシューズのきらきらと

かなかなかないつとはなしに囲まれて

突堤にリール捲く音雲の峰 相模原 岡 尚

流れ藻の立ち上がりたる猛暑かな

海開き波いきいきとしぶきあげ

内海のつづく小道や夾竹桃

天道虫ころげさうなる通り雨

蒲生野の古墳なでゆく青田風 相模原 岡本 尚子

平鍋に牛乳沸かす巴里祭

巴里祭乳房の美しき女神像

地下を出て大暑のビルに見下ろさる

短夜やことばはせぬままの夢

早稲の香の吹き上がりくる招き旗 舞鶴 小原芙美子

穂孕みの畦道抜けて墓掃除

墓山に煙の上がる盆用意

奥の間の戸も開け放ち施餓鬼棚

遠雷や自画像の頬やや瘦けて

夕風に結び目ほどくヨットかな 高槻 六車 佳奈

あとがきのやうに置かれて夏帽子

初蟬や躍る湯玉に水を差し

珠の眼を闇に見開き蟬生るる

仏壇の金色世界 蠅歩む

東京をひたすら歩く溽暑かな 水戸 山田 健太

衰へは咀嚼に來り冷奴

素麺の喉越し大事老いたれど

電球の切れも楽しき夜店かな

かなかなや罅走りたる泥団子